

Be determined!!

Kurokeiru

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三度の飯よりジョジョが好き！そんな主人公が僕のヒーローアカデミアに転生するお話です。

目次

主人公プロフィール	1
命がけのレスキュー!!?	5
転生からのベイビーフェイス!!?	9
里帰り	15
救済の光	23
唯と開	32
進路希望	43
本音	53
鍛錬	61

主人公プロフィール

主人公設定

名前：閉金としかね 開かい

個性：ジツパー

ジョジョ5部に出てくるブローノ・ブチャラティのスタンド「ステイツキーフィンガーズ」をモチーフにした個性です。今作では、「ステイツキーフィンガーズ」も一緒に出そうと思いますが、活躍するのは、体育祭中盤あたりからになります。

ありとあらゆるものにジツパーを付ける能力で、移動手段や罠などにも使えて応用が効きます。原作では、ブチャラティは空間にジツパーを取り付けて中に入り隠れているだけでしたが、今作では中で自由に移動が可能になりました（中では時間が停まっています）。またジツパーを取り付け切断したり、手を螺旋状にジツパーを取り付け相手との距離を短くし攻撃することも可能です。

身長／体重：179cm／58kg

好きな物：ピッツア、ぶどうジュース、イカ墨パスタ

嫌いな物：わさび

性格：真面目、優しい、正義感がある。

得意なこと：かくれんぼ

苦手なこと：嘘をつく事

年齢：(転生前) 19歳↓(転生後) 現在16歳

他生徒から主人公への評価

泡瀬洋雪「スマホゲーム仲間」

回原旋「カメラの良さをわかってくれ！」

鎌切尖「夏にカブトムシ取りに行こうぜ！」

黒色支配「面白いやつだ……イカ墨パスタ……好きなのか……!!？」

拳藤一佳「頼りになるやつだよ！でもたまには私たちを頼ってね」

小大唯「ん……(かっこよくて頼りになる人)」

小森希乃子「優しいよ。私の眼見ても怖がらなかつたし」

塩崎茨「真っ直ぐな心を持っていますよ。そしてとても優しいです。」

穴田獸郎太「授業中に寝ていたら起こしてくれませうぞ！」

庄田二連撃「リトルマック……好きかな？」

円場硬成「今度、野球部見に行かねえか？」

角取ポニー「偶にニホンゴ詳しく教エテくれます！」

鉄哲徹鐵 「強くて、真っ直ぐな奴だぜ！」

取陰切奈 「真面目ちゃんだね〜その分弄りやすいよw」

吹出漫我 「よく描いた絵の感想をくれるよ！」

骨拔柔造 「肩が凝りやすいって言ってるからよくマッサージしてもらってるよ。」

凡戸固次郎 「ガン〇ムを知らないだつて!?!」

物間寧人 「ほんといい個性だね。そのくせ性格いいから嫌味が言えないじゃないか」

柳靈子 「ネットの良さを教えてあげる……」

鱗飛龍 「わさびが嫌い?なのに寿司食うのか?」

ブラドキング 「日常ではその真っ直ぐな性格から彼についていく者が多いし、人もみんなを引っ張っているので今後にも期待をしている。」

主人公から他生徒への評価

泡瀬洋雪 「パ〇ドラのコツを教えてください」

回原旋 「俺は一眼レフが好きだぞ！」

鎌切尖 「昔は、昆虫採集やっていたなあ」

黒色支配 「今度サイ〇リア行こうか」

拳藤一佳 「頑張っている姿がカッコいいぜ！」

小大唯 「なんというか…… 守ってあげたくなるような子だな」

小森希乃子 「イタズラは程々にしてくれよ」

塩崎茨 「慈愛に溢れた聖母みたいなやつだなって思う」

穴田獣郎太 「授業中、寝るんじゃないやあねえよ」

庄田二連撃 「リトルマックも好きだが、クラウドを俺は使っているぞ！」

円場硬成 「球技か…… サッカーが俺は好きだな！」

角取ポニー 「ゆつくり日本語に慣れていこうな」

鉄哲徹鐵 「なかなかの男だと思うぜ！あつ漢か！」

取陰切奈 「恋愛脳だな…… いつも恋愛のことで弄られてるし」

吹出漫我 「絵が上手いなあ！今度俺も描いて欲しいぜ！」

骨拔柔造 「いつもマツサージありがとな！」

凡戸固次郎 「すまない…… あまりガ○ダムは知らないんだ」

物間寧人 「あまり、拳藤を困らせるなよ」

柳霊子 「今度、面白いサイトを教えてもらいたいぜ！」

鱗飛龍 「わさびが無理でも寿司は食うぞ！それでも美味いからな」

ブラドキング 「よく俺たちのことを見てくれる優しい先生です。自分も個性のことと相談に乗ってもらっています……これからもよろしくお願いします！」

命がけのレスキュー!!?

人生とは、不思議なものだ。

なんせ、ちよつとしたことで人生が変わっちまうんだから……

俺の名前は。大学の二年生だったものだ。

正直、俺のことを見れば100人中99人は普通の何処にでもいるようなモブだと言
うだろう。

え？後の1人はどうだつて？イケメンだと思ってくれている事を願おうかな……

(震)

とにかく、俺は平凡で特に抜きん出た才能も無けりやすることもないような男だつたよ。朝起きて、大学行って、授業受けて、バイトして……これだけをひたすら毎日続けていた。

だがしかし！こんな俺にも趣味があつたんだよ。

それは……アニメ鑑賞!!?

一見、これだけ聞くと、ただのオタクとしか思えないが1つだけどっぷりハマったものがある。

それが「ジョジョの奇妙な冒険」だ!!?

特に5部が好きで、ネットで漫画全巻とグッズもバイトで稼いだお金をつぎ込んだわ
w

えっ? オタクだって? ほっとけ!

今日は木曜日だから、ジョジョのアニメ最新話が見れる! そう思つて自宅まで走つて
帰ろうとしていた。

あんな事が起きるとも知らずに……。

自宅のマンションまであともう少し、あと一つ横断歩道を渡ればすぐに着く距離だつ
た。

まだ午後4:00だった為、周りに人は多かった。

横断歩道の信号が青になった瞬間、隣の子供が「ともちやくん」と言つて駆け出して
いたのだが、横からはなんとトラックが迫つて来ていた! それに止まりそうな気配もな
い!

今ならまだ、助けることが可能だったかもしれないのに俺は躊躇してしまい、その場
から一步も動けなかった。

ああ…… きつとこの子は死ぬんだ。でも、俺自身に害は出ない、と最低なことを思っていた。

だが、そう思った瞬間ジョジョのブチャラティのある言葉が頭によぎった。

ブチャラティ『俺は「正しい」と思ったからやったんだ。後悔は無い……こんな世界とはいえ俺は自分の「信じられる道」を歩いていたい！』

そうだ！

目の前で救えるかもしれない子供の命を、自分に害はないからという理由で見捨てるほど俺は腐っちゃいない！助けてあげたい！

そう思った瞬間、俺は全速力で走り子供を突き飛ばした。

子供が安全なところに飛ばされたのを見届けると、目の前にはトラックが迫っていた。

おそらく即死だろう。そうわかっていたのに何故か、恐怖心はなくむしろ俺は誇らしい気持ちだった。

人の為に死ぬのは、そう悪いことではないのかもしれない。

そして俺の意識はそこで途絶えた……。

羽柴重国 19歳 トラックに轢かれ死亡。

? 「ほう：： 此奴、なかなか面白いやつじやな」

〈 t o b e c o n t i n u e 〉

転生からのベイビーフェイス!??

「いっどこだよ？」

第一声がこれだった。おそらく死亡？したであろう俺は、いま何もない真っ白い空間に寝かされていた。

重国「俺って…… 死んだよなあ…… 当たり前だよなあ」

俺は、子供を庇ってトラックに轢かれぺちゃんこになったと思っっている。できることなら思いたくないがな！

重国「まず、ここが何処か把握したい。見た感じ地獄ではなさそうだし、かといって天国というわけでもなさそうだし……。」

？『ここは、転生の間じゃよ』

重国「誰だ!?？ここに居る人か？俺はなんでここに居るんだ？」

？『質問が多いは！だから、転生の間と言っとるだろうが！』

重国「じゃあ、あんたは誰だ？」

？『神じゃよ』

重国 「……………はっ? いや、はっ?」

神 『神じゃよ、貴様らが主だの、創造神だの、勝手に想像して崇めてるあれじゃよ』

重国 「じゃあ、姿を見せてくれよ! そんなの信じられるか!」

神 『だから、ないからこうやって頭に話かとるんどろう!』

重国 「アツハイ、すみません。」

神 『まあいい……………貴様には今から転生してもらおう。』

重国 「いきなり!?!? つてか転生つてあの二次小説の?」

神 『メタイ』

重国 「オリ主チートの!?!?」

神 『だから、メタイつて! こんなことしたら、作者に怒られるぞ!』

重国 「あなたの方がよっぽどメタイよ……………」

神 『何か言ったか?』

重国 「いえ、ナニモイツテマセンヨ」

神 『まあいい……………貴様には今から特典と転生する世界を決めてもらおう!』

重国 「待つてください、その前に一ついいですか?」

神 『なんじゃ? 何かあつたのか?』

重国 「俺は子供を庇って死んだんですよね?」

神『そうじゃ。あの時、お前だけがあの子を助けたのじゃよ』

重国「あの子、大丈夫だったんですか？」

神『ああ無事じゃよ。せいぜい、擦り傷程度しかないと思うぞ？』

重国「よかつたうそれじゃとつと決めるんで少し時間をください。」

神『わかつたわい。しかし早くしてくれよ？暇じゃし』

重国「分かりましたよー」

ーしばらくして…

重国「決まりましたー！」

神『おお、決まったか早う言ってくれ。』

重国「まず顔はこのままで、出来るだけ今と同じにしてください。」

神『ほう？イケメンじゃなくてよいのか？』

重国「変に変わると少し気持ち悪いのでこのままが一番いいですよ。」

神『そうか…… 変わつとるの…… でっ？特典は？』

重国「ジョジョの第5部のブローノ・ブチャラタイのステイツキーフィンガーズにし

てください！」

重国 「ちなみにどんな転生先が入ってるんですか？」

神 『言っても分かんじやr「いいから言ってください！」ハイスクールD×D、バンドリ、俺ガイル、SAO、僕のヒーローアカデミアの5つじやよ。』

重国 「ハイスクールD×Dと僕のヒーローアカデミアは少し知ってるけど、他は知らないなあ。まあ引きますか」

神 『何が出るかな♪何が出るかな♪何が出るかな♪』

重国 「あんた絶対楽しんでるだろこの状況」

神 『で、結果は？』

重国 「華麗なスルー乙です！」

神 『いいから早く言え！』

重国 「はいはい、わかりましたよ……えっと、僕のヒーローアカデミアですね」

神 『ほうヒロアカか！なかなかいいのを引いたな！それでは、早速転生してこい！わしや疲れた』

重国 「待ってください！最後に2つだけいいですか？」

神 『なんじや、さっさと言うてみい』

重国 「この事と転生前の記憶は消してください！」

神 『それは心配せんでいい。もとよりそうしようと思っておったんでね。その方が面

白いじやろ?』

重国「面白いつて…… まあいいです。そして最後になんで俺は転生できるんですか? 他の人はあの世に行くのに」

神『まあ…… 気まぐれじや。ふと地上を見れば面白そうな奴が死んどったからじやな』

重国「そつすか、ならいいです。あと、神様!」

神『ん?』

重国「ありがとうございます!」

神『……! ああ、来世じや死ぬなよ』

重国「はい、それじやまたいつかお会いしましょう! さよなら」

神『ああ、さよなら!』

そして、俺こと羽柴重国の人生は本当に終わった。

〈 t o b e c o n t i n u e 〉

里帰り

<とある病院内>

? 「うーんうーん」

ある1人の男が唸っていた。この男、AM9:00から12:00まで椅子にも座らずひたすら唸りながらうろろしている……。

男の名は、閉金鉄。としかねてつ いたってどこにでもいるようなサラリーマンである。

この男が、唸りながらうろろしているのは、今日愛する妻と自分の子が生まれるからである。

鉄「おかしい、おかしいぞ! 出産にかかる時間は、およそ1時間長くなっても2時間なのにまだなのか! 産声も聞こえない! ああ……心配だ。心配だ。」

そして極度の心配性である。自分の妻が指を切っただけで病院に連れて行こうとしたまでである。

鉄「もしかして、赤ちゃんや産声をあげないのかなのか? ああ……頼む無事に産まれ
t 『オギャー……』 おっしやああああー!!?」

看護婦「おめd「どけええええええ」キヤア!」

鉄「繫子！繫子！よくやった！本当によくやった！」

？「あなた、落ち着いて。そして大きな声を出さないで。」

鉄「ああ…… すまない。ただな少し嬉しすぎて我を忘れてしまったんだ」

繫子「もう…… あなたって人は！」

閉金繫子とじかねけいこ この心配性の男の妻である。

心配性の鉄とは違いどつかりと肝が座っており、物事をいつも冷静に考えている。

だが、今回は初の出産のせいか少し気が抜けている。

鉄「で、男の子か？！？女の子か？！？それとも両方か？！？」

繫子「両方なんてありません！少し落ち着いてください！男の子ですよ。男の子。」

鉄「男の子か！やったな！これで閉金家は安泰だ！きつと君に似てイケメンになるに

違いない！」

繫子「私は、イケメンではありません！ふざけるのもイイカゲンニシテクダサイ……。」

鉄「はっ、はい！すみませんでした！」

この夫婦、やはり妻の方が強いようだ。

繫子「この子の名前は どうします？ここは、一家の長であるあなたに決めてもらいた

いのですが……。」

鉄「そう言われると思って、考えて来ました！これでどうだ！」

自身満々に繫子に見せた紙には『開』と書いてあった。

鉄「この子は将来、自分の力で道を切り開いていつて欲しいから、この名にした！ど
うだ？良くないか？！」

繫子「なるほど……いいですね。ならこの子の名前は、閉金開ですね。」

鉄「ああ！よろしくな！開！」

繫子「ええ、よろしくね！開」

これが、後に『平和の象徴』と並ぶ、『希望の象徴』と呼ばれる閉金開の誕生である。

—10年後—

AM7:00

? 「母さん早く行こうよ」

? 「はいはい、今行きますよ。」

2人の親子が駅で話している。

? 「いいですか? あつちの学校に行っても、みんなと仲良くできるように頑張るのよ! 開。」

開 「うん! わかったよ母さん」

繫 「ええ、父さんも見ていますからね!」

そう、この親子は閉金家である。現在、繫子の実家である島根県に行こうとしているのだ。

父親は開が4歳の頃、交通事故に遭い他界してしまったのである。彼が他界した後、彼女は立ち直れずくじけてしまったが、開を強い子に育てるために、見事復帰し女手ひとつでここまで育てあげたのである。

彼女の肝の座った性格のおかげか、開は真つ直ぐで正義感が強い子に育った。

繫子 「さあ、そろそろ新幹線が発車するから乗りましょう。」

開 「うん! 島根県かく初めてだな! ねえ、母さん! 島根県ってどんなところなの」

繫子 「そうね、梨が美味しいわよ。あと、お肉もね」

開 「わあ！楽しみだなあ！ねえねえ、おばあちゃんの家で食べていい？」

繫子 「ええ、いっぱい食べて大きくなるのよ。」

『まもなく列車が発車いたします。』

繫子 「ほら！もう発車するから、乗りましょう！」

開 「うん！」

そして親子は、東京を離れ、島根県に向かうのであった。

<島根県>

？ 「ようきたねえ！繫子！開ちゃん！」

繫子 「うん。お母さん、久しぶり。」

開 「おばあちゃん！久しぶり！」

彼らが島根県に着いた時には、もう夜だった。

？ 「おお、開ちゃんおつきくなつたねえ！前見た時は、まだお母さんに抱っこされとつ

たのにねえ！」

開 「もう！去年来たじゃないか！忘れたの？」

？ 「すまん、すまん！でもちよつとしたジョークじゃよ。」

八代組子、開の祖母であり繋子の母である。少しお茶目なところがあるが、娘同様、とても肝が座っている。組子も開がまだ2歳の頃夫を亡くし1人で生活しているのであった。

開「おばあちゃん！梨食べたい！」

組子「そう言うと思つてたから切つといたよ！ほら、あんたもお食べ？好きでしょう？梨！」

繋子「ええ……いただくわ」

開「ねえ、お母さん！」

繋子「どうしたの？」

開「俺はどの学校に行くの？」

繋子「そうねえ……地元の小学校でいいかしら？」

組子「ええ、いいと思うよ。あそこならここから近いからねえ。それに、あそこの校長と私はお友達だから電話で話してみるわ」

繋子「ありがとう、何から何まで本当に。」

組子「気にせんでいいよ。それに大事な孫と娘のためじやしね。それじゃあ電話してくるよ。もう、夜遅いし今日は寝なさい」

開「うん！ありがとう！おばあちゃん」

繫子「ごめんなさい、私も今日はもう寝ます。」

繫・開「おやすみ（なさい！）」

組子「はい、おやすみ」

―翌朝―

組子「開ちゃん！来週から入学だつて！」

↳ t o b e c o n t i n u e ↳

プチ情報

閉金鉄↓個性『鉄分』鉄分を操る。

閉金繋子↓個性『連結』物と物をくつつける。

救済の光

俺が学校に転校してから3週間が経った。

自分で言うのもなんだが、俺はあつという間に人気者になった。授業で発言すれば女子から黄色い声援を受け、運動すれば女子だけでなく男子からも賞賛された。

「個性」も、すごい！かっこいい！と言われ嬉しかった。人気者になって自分も満更でもなかったし、きつとこのまま卒業すると思っていた。

俺が人気者から嫌われ者になる日が来るとも知らずに……

―ある日

開SIDE

先生「今日の授業はここまで！それじゃあみんなまた明日ね〜」

そう言って先生はすぐに職員室に行ってしまった。残された生徒は帰る支度をして

いる。俺は隣の席の女子が分からないと言っていた算数を教えていた。

開「つまりここをにかけてやれば答えが出るんだよ。」

女子「なるほどくわかったよ！ありがとね。閉金君」

開「それは良かった。それじゃ俺は家の手伝いがあるから帰るね」

女子「うん、ありがとね」

それから俺は荷物をまとめて学校を出た。それから寄り道せずにもっすぐ家に帰っていて、あともう少しで家に着くという所で俺はある事に気づいた。

開「あ、体操服持って帰ってくるの忘れた……」

そう、この日の5時間目には体育があつたため体操服を使用したのだ。ましてや外で運動をしたので汚れていた。

開「それに明日も土曜日で休日だからなあ……一旦家に帰って荷物置いて取りに行くか。」

この時の判断が彼の人生を大きく狂わせる出来事になる。だが彼はまだこの時わかつていなかった。

開「はあ……はあ…… なんとか学校に着いたな。」

あれから家に帰り母に体操服を持って帰って帰ってき忘れたことを伝えるとすぐに取りに行け！と鬼の形相で言われた。

そこから走って10分程で学校に着いた。

幸い教室はまだ空いていたため体操服を取ってすぐに帰ろうとした。

だが、なぜかまだ男子数人のランドセルが残っていた。

もう下校時間とはつくに過ぎている。じゃあ先生の居残りか？いやあの先生に限ってそんなことはしないに決まっている。

なら、どうして？

するとある男子生徒が教室に入ってきた。

その生徒の名は、獅子山雄斗ししやまゆうと。クラスでトップ的な存在の男で、開も仲良くしていた。

開「獅子山！まだ帰ってなかったのか？」

獅子山「閉金?!?お、お前こそまだ帰ってなかったのか?!?」

開「俺は、体操服持って帰ってくるの忘れただけだから。お前は どうして帰ってないんだ？」

獅子山「先生にちよーと説教くらってただけだよ！」

開「お前なんかやらかしたっけ？」

獅子山「ほら！え〜つと……宿題！宿題を何回も忘れたからだよ！」

開「そうか……。」

どうも歯切れが悪い。まるで俺から必死に逃げようとしているようだった。

開「まあ、それはいいとして後、数人ほど残っているみたいでけどお前と一緒に説教か？」

獅子山「ああ！そうなんだよ！だから、熱島ねつじまと匂野しゅうやとじゃんけんで負けてなあ、それで見んなのランドセルを持って行ってやるんだ！いやあく困った困った。」

開「そうか……気を付けてな。もう暗いしみんなと一緒に帰るか？」

獅子山「いや、大丈夫だ。お前も気をつけてな。また明日！」

そう言つて獅子山は2人のランドセルを持って、行つてしまった。

やっぱり何か怪しい。いつもの爽やかな笑顔ではなく、何か焦っている顔だった。

開「少しだけ、少しだけいいよな……。」

そう言つて開は獅子山の後を追つた。

獅子山のランドセルに付いている人気ヒーローオールマイトの鉄製ストラップがカチャカチャという音が廊下に響いていたため、すぐに獅子山が向かっている場所がわ

かった。

どうやら獅子山は、体育館に向かっているようだ。開は、バレないようにこつそりついでいった。

この頃の開は『好奇心は猫をも殺す』という言葉が知らなかった……。

??SIDE

先生「今日の授業はここまで！それじゃあみんなまた明日ね〜」

そうやって先生は職員室に行ってしまった……。

ああ…… 今日も話せなかった。

もう、すぐに家に帰りたかった。今日は金曜日だからこの後、すぐに帰れば2日は安心できる。

そして私は、荷物をさっさとまとめて帰ろうとした。

だが、神様は私の事が嫌いなようだ。

熱島「おくと、どこに行くんだい？君が行くのはこつちだよ。」
そう言つて彼に腕を引つ張られて体育館裏に連れて行かれた。

匂野「おお、遅かつたな熱島。なんかあつたの？」

熱島「すまん、すまん。こいつ逃げようとしてたんだよ。でもすつとろいからすぐに捕まえられたよ！」

そんな会話が聞こえて来た……。ああ、また始まる。嫌だよ。もう嫌だよ。だが幸い彼はまだ来ていない。きっと今日はもう帰つたかもしれない。そんな淡い希望もすぐに砕かれた。

熱島「雄斗遅くね？」

匂野「仕方ないだろ。俺らのランドセル持ってきてくれてるんだから」

熱島「そうか……。じゃあもう始めるか？」

匂野「そうだな、もうh「・・・て」あん？」

??「や・・・め・・・て」

匂 「あん？なんて？」

?? 「や・めて・・・」

匂野 「聞こえねーんだよ！」 ガスツ！

?? 「・・・ウツ！」

彼の蹴りが私のお腹に入った。痛い。凄く痛い。

でもこれからもっと痛いことをされる。

獅子山 「悪い、遅れた。」

熱島 「おせーよ、雄斗！」

匂野 「たまらずもう始めちやったぞ！」

獅子山 「すまんすまん。ほら、お前らのランドセル。じゃあ始めるか！」

獅子山・熱島・匂野 「「楽しい楽しい遊びを!!」」^{イジメ}

?? 「や・めて・・・」

獅子山 「大丈夫！心配するな！」

?? 「や・めて・・・」

熱島 「死なないようにしてやるよ！」

?? 「や・めて・・・」

匂野 「シヨックで死ぬなよ？」

?? 「やめてエ……」

獅子山 「頼むぜ………小大？」

小大 「やめてエエエ!!」

もう辺りは真つ暗だしきつと誰も助けてくれない。

もうこんなことをするのはやめて欲しい。

痛い。痛い。痛い。痛い。

お願い。なんでもするから………

私を助けてください……。

?? 「おい！ テメエら何やってるんだ！？」
 神様は私のことを嫌いだが見捨ててはいないらしい……。

〈 t o b e c o n t i n u e 〉

プチ情報

獅子ししやまゆうと山雄斗ねつじまれつか ↓ 個性 『獅子』 獅子に変身して戦う。
 熱島烈火ねつじまれつか ↓ 個性 『熱』 体の熱を自由に変えることが可能。
 香川匂野かがわしゅうや ↓ 個性 『匂い』 体からありとあらゆる匂いをだせる

唯と開

小大SIDE

私の名前は小大唯こだいゆい。

個性は『サイズ』。触れたものの大きさを変えるだけの個性。お父さんからは、「お母さん似で可愛いぞ！」といつも言われていた。

小学校4年生までは、友達も少しながらいたし、学校生活も楽しかった。

だが、小学校5年生になるとクラス替えがあり、仲の良かった友達とも離れてしまった。

ある日、話したこともないような男子から呼び出された。その男子の名前は獅子山雄斗ししやまゆうとといって、学年でもトップクラスにモテていたしクラスの女子の何人かは彼に好意を抱いていた。

でも私は彼のどこがカッコいいかわからなかった。たしかに顔は整っていたし、スポーツもうまかった。でも何故か彼を好きにはなれなかった。

呼び出された場所に行くと、彼は「君の事がずっと好きだった！俺と付き合ってくれ！」と言われたが、話したことも無かったし好きでもなかったので「ごめんさい」と

断った。

そこから私の学校生活はどんどんおかしくなっていた。

クラスの男子や女子は私を無視し、事故に見せかけて足を引つ掛けたりもされた。お母さんに相談しようとしたがきつとお父さんにも話すに違いないし、両親を心配させたくない一心でずつと我慢していた。だが、いじめは止まずむしろエスカレートしていった。一番ショックだったのが昔から仲が良かった子から「もう近寄らないで！あなたと一緒にいたら私もいじめられる！」と言われたことだった。

そんな中、また彼から呼び出された。彼はやめて欲しかったら自分と付き合え、そうすればまた元のような生活が送れると言ったが私は絶対に首を縦に振らなかった。せめてもの抵抗だった。

そしてついに私は暴力を受けた。呼びだされては暴力を受け、また呼びだされては暴力を受ける……。彼は他の人にこのことがバレないように顔だけは狙わず、体をひたすら殴った。痛かったし辛かったが、ここで根を上げれば自分の嫌いな男の女になつてしまう。それが嫌で必死に我慢した。

ところがある日、彼は自分の腰巾着の2人を連れてきて私を袋叩きにした。最初は2人も若干抵抗気味だったが、次第に私の反応を楽しむようになった。それから、私を殴るメンツは1人から3人に変わった。

いじめを受けて5ヶ月ほどたったある日、1人の生徒が転校して来た。転校生の名前は閉金開としかねかいと言うらしい。彼は瞬く間に人気者になった。長身でスポーツ万能で勉強もよく出来た。何より性格が良く全員に分け隔てなく接していた。いじめられている私にも優しくしてくれた。だが、彼は私をいじめている獅子山とも仲が良かったためこのまま私と仲良くしては彼もいじめられてしまうと、すぐに彼から離れた。できるだけ彼と話さないように……………。

もう私はボロボロだった。心も体もなにかも、もういつそ自殺でもしてしまおうか？そんなことも考えていた。今日もまた暴力を受ける。

お願いします。

誰でもいいから私を助けてください。

「おい…テメエら何やってんだ！」

声の主は、優しい転校生閉金開だった……………。

小大SIDEOUT

開SIDE

怪しいと思ったら、獅子山は女子を殴ろうとしていた。

「おい！ テメエら何やってんだ！」

「「……」」

いきなり声をかけられて3人は驚いたようだ。

「閉金？？ なんでお前が此処に居るんだ？ もう帰ったんじゃないのか？」

「おい雄斗！ なんで閉金がいるんだ！」

「ま、まずい！ 見られた！」

3人はうろたえたり、焦ったりしているが自分は怒りで頭がどうにかなりそうだった。

俺はヒーローに憧れていた。

だから悪いことが嫌いだし、特にいじめなんて死ぬほど嫌いだった。

「なんで、小大を殴ろうとしているんだ？ ましてや3人で！」

「ちっ…… まあいいや。 見られたからには教えてやるよ！ こいつが俺の女にならないからだ！」

「は？ こいつは何を言ってるんだ？ 小大が自分の女にならないから殴ろうとしただけ？」

「テメエ…… とんだゲス野郎だな！ はつきり言ってその行動は、敵そのものだけ？ 自分の欲しいものが手に入らないから暴力で手に入れようだなんて心底軽蔑したぞ！」

待ってろ小大！今助けてやるからな」

「なんだ？ヒーロー気取りか？この女は俺のもんだ！」

「言っても無駄なようだな！」

そう言つて俺は獅子山めがけて走つた。俺の個性は、『ジツパー』触れたものにジツパーを取り付ける個性だ。それに引き換え、獅子山の個性は『獅子』獅子に変身して戦うがまだ子供のせいとか、完全に変身しきれていない。だがそれでもパワーは人以上。それに素早さも上がる。

相性が悪すぎて笑えてくる！だが、そんなことでここを逃げ出せばきつと自分は一生後悔する。なんとしてでも獅子山を倒すか、行動を封じるかしないといけない！唯一の救いは身長は自分の方が高いということだ。

「オラァー！どうした閉金？さつきまでの威勢はどうした？小大を助けるとか言つてなかつたか？」

「くっ……」

獅子山の力は強く、防いでもダメージはくるし攻撃しても素早さが上がっているため全く当たらない。

悔しいが手も足も出ない。しかもコイツ一撃で仕留めずジワジワと攻めて来やがる！そして、最後に完璧に仕留めるつもりだ！その攻撃の仕方は本物の『獣』だった。

仕方がない！コイツを倒すには「覚悟」を決めなくっちゃあいけないみたいだ。

俺は獅子山の攻撃を全て受け、ついに押し倒された。

「どうだ？参ったか？今なら、すみません獅子山様！今後あなたの部下として過ごします！だから許してください！」と言えば助けてやる！」

「……………」

「おいおい、恐怖で喋れなくなっただか？笑えるな！俺の個性は最強なんだ！お前みたいな弱つちい個性で俺を倒せると思うなよ！」

「くくく……………」

「どうした？今度は恐怖で気が狂ったか？」

「いや！お前に感謝しているんだ！獅子山雄斗！」

「……………何？」

「お前は俺の左腕と首だけをつかんでいる！すなわち右手は空いてるんだ！」

「それがどうした？お前の力じや俺を押しつけることなんてできないぞ！」

「獅子山……………俺の個性は触れたものにジッパーを取り付けるんだぜ？」

「……………テメエ！まさか！」

「そのまさかだ！お前の胴体はガラ空きなんだよ！」

そう言つて右手で獅子山を触れた。すると奴の胴体にジッパーが取り付けられ上半

身と下半身は、切断された。

「ギャアア!!? テメエなんてことしやがる死んじまうじゃねえか! それになんだ! 下半身が全然うごかねえ!」

「安心しな! ジツパーは俺が解除しなけりやずつとついたまんまだから、死にはしねえよ!」

そう言つて奴から離れた。これでこいつは大丈夫だろう。あとは……

「おいテメエら!」

「ビクッ!」

一緒にいじめようとしていた熱島と香川は逃げようとしていた。

「テメエらだけ許されると思うなよ? こいつと同罪だからな!」

「すみません! なんでもしますから許してください!」

「ああ! それに俺たちや、雄斗に誘われてやったんだ! 悪いのはあいつなんだ!」

言い訳をものすこいスピードで行つてくる2人。

獅子山に誘われただと?

「なるほど…… 理解した」

「だろ? 俺たちは悪くないんだ! だから許してくれよ!」

「ああ、理解したさ。テメエらがこいつ以上のゲス野郎ということをな!」

「!?」

「何テメエらだけ助かろうとしてんだ?言つとくがお前らが一番最低だからな!いじめの理由もないのに誘われただけで獅子山に加担していじめやがって. . . だがお前らまでジツパーでバラしちまえばこのことを先生に伝えられねえ。幸い今ならまだ先生はきつと職員室に残つてゐるはずだ. . . だからテメエら2人のうちどっちか先生呼んでこい!いいか?途中で逃げようなら. . . : . . . わかつてるよな?」

「はいいい!分かりましたああああ」

そう言つて香川が職員室に走つて行つた。

その間に俺は小大のところに行つた。

「大丈夫か?あいつらにどこか殴られたか?」

「.」フルフル

「怖かつたな. . . でもきつともう少して先生が来てくれるから待つてな」

「.す.れ.」

「ん?どうした?」

「なんでたすけてくれたの」

「え?」

彼女は俺に今までのことを話してくれた。俺と仲良くすれば俺もいじめられると

思つて会えて避けていたと聞いた時には涙が出そうになった。

「話してくれてありがとう、そしてもつと早くに気付いてあげられなくてごめん」

「大丈夫…… 助けてくれてありがとう」

そして彼女は俺の耳元で「あなたは私のヒーローだよ」と言つて氣を失つた。余程安心したのであろう。俺はそのまま彼女を支えていた。

開 SIDE OUT

数分後、先生が来た。俺は助けるためとはいえこ個性を使ったことを先生から怒られ、保護者を呼ばれた。母さんは、怒つていたものの、「よくやったね。」と褒めてくれた。俺はそれだけで良かったし、彼女も救われた。

彼女の両親も呼ばれ、「気付いてあげられなくてごめんね」と泣きながら誤つていた。彼女ももう大丈夫だから氣にしないでと言つていた。すると彼女の両親がこちらに来た。

「この度は誠にありがとうございます。息子さんのお陰で娘は救われました！本当にありがとうございます」

「いえいえ、大丈夫ですよ。」

「なんとお礼を言つていいやら…… 開君と言つたかい？」

突然俺に話がとんできた。

「はい。そうですか……」

「娘を助けてくれて本当にありがとうね！」

「いえ、当然のことをしたままでですよ。」

「この歳で偉いねあ！おじさん感心しちゃったよ！そして君にお願いがあるんだがいいかね？」

「はい、かまいませんがなんででしょうか？」

「それじゃあ遠慮なく。唯のことを任せていいかね？」

「え？」

「唯は友達が少なくてね、そして引つ込み思案だからあまり他の子と喋れないんだ。ましてや今回のことで男子に少なからず恐怖心を抱いていてもおかしくないからね……任せていいかね？」

「俺は大丈夫ですけど……俺も男ですよ？」

「君は唯のことを助けているくれたからきつと大丈夫さ！唯もいいかい？」

「うん！」

彼女はそう言ってくれている。ふと目があうと顔を赤くするが、きつと大丈夫だろう。何より俺は今回のことで彼女のことが放つて置けなくなつたのだ。

「わかりました！自分に任せてください！」

「ああ！頼んだよ！」

こうして、小大唯は救われた。

余談だが、3人は校長先生や担任にしこたま怒られ、このことが近所にバレたらしく夜逃げしてみたんだ。

何故だか俺はみんなから避けられるようになった。きっと獅子山が夜逃げする前にみんなに俺のした事を言いふらしたんだろう。でも俺は気にしないことにした。なぜなら……

「開くん、あそぼ！」

「唯！いいぞ何する？」

人見知りだが、俺だけに心を開いてくれる友達ができたからな！

l t o b e c o n t i n u e

進路希望

また夢を見た。

ここ最近、ある男の生涯の夢ばかりを見る。

その男の生き様は一言に言えば壮絶なものだった。

その男は父親を守る為に、12歳で殺人犯になった。

その男は激しく麻薬を憎んでいたが、それを流通している組織に忠誠を誓っていた。

その男は娘を自分の都合だけで手にかけてようとした組織の長に牙を剥いた。

その男は20歳という若さでこの世を去った。

俺は、その男の一生涯を何度も繰り返してみた。

そこで分かったたことが1つあった。その男の能力が俺の個性と全く一緒だったということに……

これには驚くしかなかった。個性が似ているものはこの世にいくらでもあるが全く同じ個性などこの世に存在しないからだ。

だが、あの男は確かに『ジッパー』を使っていた。

しかし、俺はこの男に憧れを抱いた。

己の信じる『正義』を貫き、仲間のために『覚悟』を決める。

その姿はまさに『ヒーロー』だった。

そして俺はこんな男ヒーローになりたいと思ったのだった。

あの出来事以降、開と唯はいつも一緒にいた。

何より唯が開から全く離れないのだった。朝登校するときも、下校するときも、遊ぶ

時も……。

学校では、2人をいないものとして扱っていた。だが2人はそんな扱いに負けずに小
学校生活を終え、卒業していった。

それから2人は、学校関係者が誰もいない中学校に受験をした。

唯は苦手な数学を開に教えてもらい、開は苦手な英語を唯に教えてもらった。

結果は、2人共合格。今度は2人のみならず2人の両親までもが大喜びしていた。

中学校生活が始まると、今度は唯が人気者になった。

物静かで、スタイルも良く、美人な唯に好意を寄せていた男子は沢山いたが、唯は開
から一向に離れなかった。

唯SIDE

辛かった小学校生活を終えて私と開は小学校の人が誰もいないような中学校を受験
をした。

開に救われたあの日から毎日色あせていた頃とは違いとても華やかな毎日に変
わった。

開は、こんな私の為にみんなを切り捨てて、私を選んでくれた。

本当に嬉しかった。

だが、中学生になってから2つだけ嫌なことがある。

1つは、中学に入ってから私に告白してくる人が増えたということだ。

あの事件以来、私は開と家族以外の男とは一切話さなかったし関わらなかつた。なのに「一目惚れ」というワードを使って告白してくる……

もちろん返事は全員断つた。

私はもう心に決めた想い人開がいるからね♪

2つ目は、開が私を全く異性として見てくれない……

私は長かった髪を切りショートカットにし、開と出掛ける時は少なからずオシヤレもした。

開ははつきり言つて鈍感すぎる。

他の子からも明らかに好意を向けられているのにわざとやっていうほど気付かない。

でも私は、開が振り向いてくれるまで絶対に諦めない。開が他に好きな子ができても諦めない！

だって、私のために全て捨ててまで一緒にいてくれたんだから。

今度は、私があなただを幸せにするから！

唯SIDEOUT

「え、皆さんも今日から中学3年生と言うわけで、そろそろ本格的に進路を決めて行ってもらいいます！」

開と唯は中学入学から3年経っておりもう受験期真つ只中である。

「幸いこの学校では生徒は優しくいじめ等が一切なかったためなかなか快適な3年間だった。」

しかし中学3年生になればみんな進路のことに切り替えなければいけない。その中でも人気なのが……

「といってもほぼ皆さんヒーロー科志望ですよね。」

そう、ヒーローである。

中国の軽慶市で「発光する赤児」の報道以降世界各地に超常現象が現れ、その後世界の八割の人口が『個性』と呼ばれるなんらかの力を持った。

しかし当然力を持て余す輩が増えて犯罪も多くなった。

それを取り締まる為に始まった職業が「ヒーロー」で、特に圧倒的な力で敵を抑え、存

在そのものが犯罪防止にもなったヒーロー「オールマイト」は平和の象徴とまで謳われた。

開もオールマイトに憧れていた。

「なあ、進路どうするよ開」

「うん？」

開に話しかけている男子生徒の名は、けんじょうためる堅剛溜。

開が中学に入ってから始めてできた友達である。

「どうするってまだ決めてねえよ」

「まじか!? てつきりお前なら雄英でも目指すのかと…」

「バーカ、確かにヒーローにはなりたいけど別に雄英じゃなくてもいいだろう？」

開は幼い頃からヒーローに憧れていたため高校ではヒーロー科があるところに行く
と決めていた。

しかし開には一つ悩みがあった。

「うちあんまり金ないからさ、出来るだけ学費が安いところがいい。」

「あー…なるほど」

開は成績もかなりいい方だし、『個性』もなかなか応用が効いているので雄英も十分狙える。

しかし雄英は日本でもかなりのトップクラスの学校で当然高額な入学費や授業料、ましてやヒーロー科に入るのならもつと金が必要になる。

父親を亡くし、母と祖母の3人で暮らしている中で払えるような額ではないし、何より家族想いの開は迷惑をかけたくなかった。

「まあお互い頑張ろうや!」

「…… ああ!」

この時、開は改めていい友達を持ったと思った。

その後、授業を終えて開は帰りの支度をしていた。

「さて…… 帰るか。」

この日は7限までであったため疲れていた。

しかし家に帰ったらすぐに祖母の手伝いをしたいと思っていた。

「…… 開」

「おお! 唯どうした?」

そこには自分の家族と同じくらい大切な友人がいた。

「帰ろ?」

「ああー、いいぞー！」

2人は学校を出て帰り道をたどっていた。

そんな中、唯が口を開いた。

「開は高校どうするの？」

「急にどうした？お前がこの手の話をするなんて珍しいな！」

「知りたいからじゃダメ？」

そう言つて上目遣いで首を傾げてきた。

可愛い

「ああ、出来るだけ学費が安いところにいこうと思つているよ」

「なら、私もそこに行く。」

そう言つて唯はにっこり微笑んだ

「え？お前確か、雄英志望じゃなかったっけ？」

「うん、でも開がないから行くのやめる。」

「おいおい、よく考え直せお前の一生がほぼここで決まるんだぞ？」

「いいの。それかもういつそ高校行かず2人で開のお婆ちゃんのところ継いで、静かに

暮らす？」

「お前なあ……」

はつきり言つてこの小大唯という少女は閉金開に依存している。

いくら幼い頃助けてもらったとはいえ、少し異常である。

「なあ、唯」

「どうしたの？ やつぱり農家継ぐ？」

「違う。お前は どうして俺のいく方向に合わせるんだ？」

「え？」

「何度も言うがこれはお前の人生だ。別にお互い違う高校に行つたつて家も近いからすぐに会える。それにお前ならすぐに友達ができるし、もう寂しい思いをしなくてもすむ。俺はお前が大事だから言つてるんだ。」

「……………」

「お前が嫌いだから、よそへ行けと言つてるわけじゃあ断じてない。むしろお前のことは大好きだ。だからこそお前には幸せになつて欲しいんだ。」

「……………」 お前じゃなくて唯……………」

「すまんすまん！ でもわかつてくれたか？ 唯」

「……………」 うん……………」

「gr^ッaz^{ラッ}ie^{ッエ}！ じゃあ俺はこつちだから！ ちゃんと考えろよ！」

「うん……………」

「じゃあな！バイバイ！」

そう言って開は手を振って走って行ってしまった。

「…………… そんなの開の事が好きだからに決まってるじゃん……………」

少女の呟きは誰にも聞こえない

〈 t o b e c o n t i n u e 〉

本音

「ただいまっ」と

開は唯を説得後無事家に帰宅した。

と言つても開と唯が別分かれたところからたった100m程の所に家がある。

祖母が昔から住んでいるこの家は決して広くもないが、どこかホツとするような場所なのである。

「おかえりなさい!」

玄関をくぐると女手ひとつで自分を育ててくれた母が来てくれた。

髪は昔に比べだいぶ白くなり、顔にもシワが増えている。

年齢より歳をとつていそうに見えるが十分綺麗だと開は思っている。

「今日は学校どうだった?」

「いつもどうりだよ、婆ちゃん畑にいるの?」

「いるけど……まさかあなたまた勉強すっぽかして手伝おうとしてるの?」

「別にすっぽかしてないよ。飯食い終わった後いつもしてるよ。」

そう言つて開は自分の部屋に戻った。

やや反抗的な態度だがこれ以上話していると、また進路のことを話し出すので早めに話を切り替えたのである。

それから制服を脱ぎ、汚れても大丈夫な格好に着替えて裏にある畑に向かった。

「婆ちゃん！ たいだいまー！」

「おお、開くんお帰り」

母同様に昔から自分を育ててくれた祖母が優しく迎えてくれた。

母が働いてあまり家にいなかったときに、母に代わってよく開と遊んでくれたのだった。

幼い頃に、父親を失ってから開は誰よりも家族を大事にした。

まだ祖母の家に住む前に働き詰めだった母を少しでも楽にしてあげたいが為に、僅か7歳で掃除に洗濯、食事を作るなどの家事を習得した。

祖母の家に移行後もたまに食事を作ったりもしている。

「婆ちゃん、何か手伝う事あるか？」

「そうさね、季節も変わったからもう一度畑を耕そうかねえ」

婆ちゃんの作る野菜や果物は美味しい。

余った分をご近所さんに渡したりもしていたがなかなか好評である。なんでも、みずみずしくて鮮度もよくて料理に使いやすいからだ。

そんな美味しい野菜を作るためには、色々手間をかけねばならない。

いい土、化学肥料ではない肥料など……昔ならまだしも今年80になる婆ちゃんには正直しんどいと思う。

だから、俺が手伝って少しでも楽になって貰いたいと思っている。

「今日はこのぐらいいさにしとこうかねえ〜」

「ああ。婆ちゃんお疲れ様」

畑を鍬で耕して2時間、もう真っ暗である。2人はさっさと畑から出て土を払い、普段着に戻り家に戻った。

「あら、お疲れ様もうご飯出来てるからさっさと食べちゃいなさい。」

「うん、分かった。」

「あとそれから」

「うん?」

「食後に私の部屋に来なさい。」

「…………… わかった」

この時点で開は母親から何を言われるかわかったのである。

「来たわね」

30分後開は母親の部屋で正座をしていた。

だが、気になることが一つあった。

「なんで、婆ちゃん居るの？」

「おや、居ちゃいかんのかい？」

「そういうわけじゃないが……………」

「お婆ちゃんは私が呼んだの。あんたの現状を教える為にね。」

それから母親は開の現状を祖母に話した。行く高校が決まっていないうこと。農業を手伝っているので勉強も疎かになっていることを……………

「ふむ、今の話は本当かえ？」

全てを聞いた婆ちゃんは無表情でそう言った。

怒っているわけでもなく、かといって笑っているわけでもなく、ただ無表情に。

「…………… ああ、概ねあつてるよ。こんなこと言いたくねえけど婆ちゃんもう歳だろ？そんな婆ちゃんを一人で農業なんてとてもじゃないが見てられないんだよ。」

「…… わしは、まだまだ動けるぞ。」

「そういうことじゃあないんだ。これから夏も来る。俺や母さんがいない間倒れたりしたら誰が助けを呼ぶんだ？ 怪我をしたら誰が病院に連れてくんだ？」

でるわでるわ今まで溜まっていたこと。

「不謹慎だとは思いますがもしそれで婆ちゃんが死んだら、誰が責任取るんだ？ それにシヨックで母さんが寝込んだらどうする？ もう俺の家族は母さんと婆ちゃんしかいないんだ！」

「開くん……」

「何より高校進学のコ、誰が用意するんだ？ 母さんが働いてくれてる金で仮に入学できたでしょう。でもそこから3年間毎月お金がいるんだよ？ それを稼ごうとして母さんが仕事の量を増やして倒れたら元も子もないんだよ！」

「開……」

「それに勉強が疎かになつてるだつて？ いつも食後から寝るまでしつかりしてるよ！ げんに今まで赤点とつてないだろう！」

これが開の本音だった。

開は優しく正義感が溢れる少年だったし、家族を大切にする子だった。

故に開は自分の本音を言わず、弱音を吐かず家族の為に尽くして来た。

友人関係も心配されないように築いて来た。小大唯も3年間見守ってきた。だが、開も人間である。

苛つく事があれば怒るし、ストレスも溜まる。

かといってそれが嫌で逃げれば、また誰かに心配させて迷惑をかけてしまう。だから耐えた。必死に耐えた。

「塵も積もれば山となる」と言うことわざがあるように、勉強と農業の疲労で開も最近限界だった。

必死に押さえつけていたものの、ついに溢れかえってしまったのである。

「……開くん、そんな事があったのに手伝ってくれたんだね……」

「開……ごめんね……あんたの事も知らずに怒ってごめんね」
やっってしまった。

開が最も恐れていたこと、家族を泣かしてしまった。

「いや、俺も言い過ぎた……」

「でもね開、あんたも1つ間違ってるの」

「何が？」

「この家、実は結構お金持ちなの」

「……は？」

信じられない、母は汗水垂らして必死に働いていたのを開は知っている。

「あんたが生まれる前に、お父さんとお母さんはバリバリ働いていたわ。でも母さん達ね、将来の子供のために全部貯金してたの」

「十分お金も溜まったわ、でも心配だったの。子供が怪我でもしたらどうしよう、とかね」

「母さん……」

「そんな心配もあつて今に至るの」

「わしもなあ、爺さんが遺した大金があつてのお。使うこともないから残しといたんじゃないよ。」

「婆ちゃん……」

「だからお金の事は心配しなくていいのよ」

「ああ、それに農業は今年で終わりにしようと思つてたんじゃ。開くんの言う通り、しんどいからの」

「……」

「だから、開」

「…… うん？」

「今からでも遅くないから、真剣に進路のこと考えて！開、あんた昔言つてたじゃない

！」

『俺、ヒーローになりたい！』

「母さん、婆ちゃん……」

「うん？」

「どうしたんじや？」

「俺……雄英に行つてヒーローになりたい」

「頑張りなさい」

俺はたった今、夢に向かってエンジンをかけた

↳ t o b e c o n t i n u e ↳

鍛錬

俺は次の日進路の先生と話し合い、以前書いていた高校をやめ志望高校を雄英高校に変更した。

ただ先生からは、「君の成績なら合格圏内だが、君ならもつと上を目指せる。」と言われたため、勉強により一層力を入れることにした。入試まであと約10ヶ月なのでまあ間に合うと思う。

ただ、問題なのが「実技試験」である。

例年ではロボットを倒したポイントによつて合否が決まるらしい。

しかし、この試験にはきつと隠しポイントがあると思う。なぜなら……

①倍率300で入学できる生徒（ヒーロー科）は2組だいたい40か、41ぐらいしかないなので合格するには他者のポイントより群を抜かねばならないのにロボットに限りがある事。

②他者を蹴落とすといえどヒーロー科の入試のため、必ず『助ける』といった行動も何かしら関係してくる。

この2点をまとめれば『人を助けるといった行動にも何かしらのポイントに加算され

る』かもしれないということ。

あくまで俺の考えであるから正解ではないかもしれないがやって損はないだろう。

さて、ここまで説明したもののいくら人助けをしたところで肝心なポイントを稼げなければ意味がない。

試験はロボットを行動不能or破壊の2つのどちらかでポイントが増えていく。

俺の「ジッパー」は触れる事によってはどうする発動型の個性であり、逆に言えば触れなかつたら発動しない。

要するに、今の俺に必要なものは「身体能力を上げる」ということ。

入試まであと10ヶ月しかないので毎日、筋トレとランニングを開始することにした。幸い婆ちゃんの手伝いをしていたから少しではあるが筋肉は付いている。

早速、家に帰ってトレーニングをしていたんだが……

「なくんで、唯さんがいるんですかねえ!!?」

「ん?」

「いや、ん?じゃなくて……てか何してんの?」

皆さまお馴染み、小大唯が居た。何か捨てられていたゴミを「個性」で小さくしていた。

「何って……入試対策?」

「なんで疑問形かは知らんが何しにきたんだ？」

「開の監視と個性のトレーニング」

「監視て……よく俺がここにいてるってわかったな」

今俺がトレーニングしているのは近くの山の麓で、田舎だからかさほど人が通らないので此処を使わせてもらっている。

「……開あるところに唯あり」

「何言ってるんだ」

「……てへっ」

「可愛いけど誤魔化せてねえぞ、なんでわかったんだ？」

「開のお義母さんに聞いた。」

「マジかよってなんかお母さんの漢字おかしくなかったか？」

「開メタい」

そんなこんなで唯の隣でトレーニングをしていた。

俺のメニューは腕立て、スクワット、腹筋、サイドステップ、ランニングの5つ。

最初からとぼして100回は無理なのでまず30回から始めることにした。

腕立てをしようとする

「んっしょ」

「あのくなんで唯さん俺の上に乗っちゃってんですか？」

「開の為」

「いや、初日だよ!!? キツくね!!?」

正直言つて唯は、体重は軽いし現状況さほどしんどくはないが問題は背中にもろに唯のお尻が当たってる。テンパってしまう俺氏。だって俺DTだよ!!?」

「開すつごく動揺してる」

「当たり前だろ！俺も一樣、男だぞ!!?」

「…………… 開のえつち／／」

「恥ずかしがるならやるなよ!!?」

唯さんは、顔を赤くして背中をポカポカ叩いていた。あら可愛い。

初日はこんなやりとりをしていたせいですぐに日が落ちたので、家に帰宅することにしました。

確か今日の晩飯の当番は俺だったと思うからすぐに唯を送って帰った。

帰ったら母さんが「2人で、ナニしてたの？」ってニヤニヤしてたので晩御飯に母さんの嫌いなパセリを大量にぶち込んでおいた。

俺、入試まで間に合うかなあ泣

{
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
}